

# 同 志 社 大 学

## 2013 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2014 年 3 月 20 日提出

| 所 属              | 職 名  | 氏 名  |
|------------------|--|------|
| 心理学部             | 准教授  | 及川昌典 |
| 研 究 題 目          | 多重自動性モデルに基づく意識と無意識の制御  |      |
| 研 究 成 果<br>の 概 要 | <p>平成 25 年度は、前年度の研究成果（精緻化された多重自動性モデルとその調査データ）を踏まえて、多重自動性モデルから導かれる新たな仮説の検証を行った。2つの研究（実験・調査）が行われた。</p> <p>まず、種類の異なる自動性に依存した潜在態度の測定を、異なる文化圏（アメリカ、イスラエル、日本）で実施した。これにより、文化依存性／文化独立性（通文化性）の観点から、生得的な自動性と獲得された自動性の特徴の違いについて実証的な検討がなされた。</p> <p>心的過程には、文化を問わず同様の結果をもたらす経路と、文化に応じて結果が異なる経路が存在すると考えられる。多重自動性モデルに基づけば、生得的な自動性は意識的にアクセス可能な文脈情報に影響されない頑健な特徴を持ち、一方で、獲得された自動性は意識的にアクセス可能な文脈情報の変化に柔軟に対応する性質を持つものと考えられる。このことから、生得的な自動性は文化を問わず一定の結果を導くが、獲得された自動性は文化に応じて異なる結果を導くことが予測される。日本人参加者と他文化参加者とは、報告されるエージェンシー感覚の程度が異なるが、この国別の差は主に意識的な内省過程の働きに起因したもので、意識を必要としない自動的過程を通じて生じるエージェンシー感覚には、国別の差が認められないことを見出した。</p> <p>また、自動性の発達を検討するために、乳幼児（0 歳から 5 歳）とその母親を対象に、縦断的調査及び実験が行われた。約 60 組の対象者は平均 3 カ月ほどで 3 回の面接と課題調査を受け、日常における自己制御における自動性がどのように発達していくかを記録された。この調査により、自動性の生得的な側面が明らかにされた。</p> |      |